

世界は団地でできている

団地と映画

2025.3.12水—8.24日

高島屋史料館 TOKYO 4階展示室 (東京都中央区日本橋 2-4-1)

開館時間=10:30-19:30 休館=火曜 (祝日の場合は開館し、翌日休館)、8月20日 (全館休業) 入館無料

高島屋史料館

TOKYO

主催=高島屋史料館 TOKYO

監修=団地団 (大山顕、佐藤大、速水健朗、稲田豊史、山内マリコ、妹尾朝子)

グラフィックデザイン=原田祐馬、山副佳祐、大隅葉月 (UMA/design farm) 展示デザイン=座二郎、天本みのり

担当学芸員=海老名熱実 (高島屋史料館 TOKYO)

団地と映画

—世界は団地でできている

事件の
起こる場所

特撮の
壊され役

Pruitt-Igoe collapse-series from WikimediaCommons

団地をこよなく愛し、日夜、団地について真剣に探求し続けてきたクリエイターユニット「団地団」を監修として迎え、「団地と映画」をテーマにした展示を開催いたします。

かつて団地が今ほど注目されていなかった時代から、「フィクションに登場する団地」の魅力をいち早く発見し、それを言語化して発信する活動を行ってきた団地団。その団地をめぐる言説の魅力は、映画、アニメ、ドラマ、小説、漫画などを縦横無尽に参照し、各所に登場する団地について、それぞれの知見から、好き勝手に繰り広げられていく、そうした過程にこそあるといえるでしょう。自由で、散漫で、時に宇宙レベルにも達し、ややもすると飛躍し過ぎとも思える放談の数々は、それゆえに、団地団にしか辿り着けない、唯一無二の批評世界をもたらしてくれます。この豊かな団地批評を、一人でも多くの方に届けたいと思います。

本展では、団地団が「団地映画」と名付けた諸作品に注目いたします。そうした作品群において団地はどのように描かれてきたでしょうか。数多の映像表現を、団地を軸にして観察してみると、実は、団地のイメージがいくつかのパターンに沿って変遷してきた事実が浮き彫りになってきます。そして、さらにその背景には、個々のクリエイターがそのように団地を描いた時代の必然があったことが、団地団の妙技によって炙り出されるのです。このような観点から、「地霊と設備」「侵入・脱出」「湾岸」「自然／環境」「妻たちの孤独」「子供と特殊能力」などのキーワードで団地を語る第3章は、それぞれが第一線で活躍する団地団メンバーによる団地批評のクライマックスです。ここから生まれる、新たな団地を主人公とする一大スペクタクルを、ぜひご堪能ください。

「あなたのこと
団地中の人に
知らせてやるわ」

—映画「団地妻 昼下りの情事」(1971)

「もしも亡くなったときは、どうやって下まで降ろすんですか？」

あのエレベーターじゃ棺桶も入らないし」 —映画「家族ゲーム」(1983)

「団地で生まれ、
団地に死す」

—テレビドラマ
「団地のふたり 第6話」
(2024)

会期中 主演団優賞発表！

本展を通して、改めて、映画やドラマで主役ぶりの活躍をしている団地はどこか考えてみたいと思います。会期中には、団地団が選出する《主演「団」優賞》の発表も予定しています。詳細が決定次第、当館HP/SNSでご案内します。

高島屋史料館TOKYO (東京都中央区日本橋2-4-1)

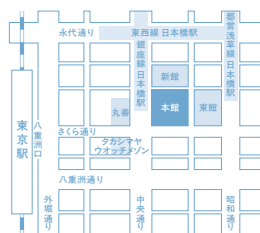
日本橋高島屋S.C. 本館4・5階

*5階旧貴賓室は、対面での

イベント開催時のみ開館します。

<https://www.takashimaya.co.jp/shiryokan/tokyo/>

・JR「東京駅」八重洲北口から徒歩5分
・東京メトロ 銀座線・東西線「日本橋駅」直結
・都営地下鉄 浅草線「日本橋駅」から徒歩4分
*駐車場は大変混雑しております。お車の出庫には非常に時間がかかるため、ご来館の際は公共交通機関のご利用をお願いいたします。



団地について語るといふことは、
時には家族を、社会を、階級を
語ることになるのです。

団地団

大山 顕

(写真家・ライター)

佐藤 大

(脚本家)

速水 健朗

(ライター・編集者)

稲田 豊史

(ライター・編集者)

山内 マリコ

(小説家)

妹尾 朝子

(漫画家)

団地団とは

団地団とは2010年12月、新宿ロフトプラスワンのトークイベントで結成されたトークユニット。メンバーがそれぞれの立場から、映画、マンガ、アニメなどに登場する団地について深く考察して大放談を繰り広げます。話題は団地の美観や構造に対する偏愛にとどまらず、団地登場作品の演出論から大衆文化論、果ては都市論や郊外論にまで飛び火。知恵熱必至の知的エンタテインメントです。

●大山 顕 (おおよま・けん) 1972年生まれ。写真家/ライター。工業地域を遊び場として育つ。千葉大学工学部卒業後、松下電器産業株式会社(現Panasonic)に入社。シグマ・ク部門に10年間勤めた後、写真家として独立。団地研究家としての顔も持つ。執筆、イベント主催など多様な活動を行っている。著書に『ショッピングモールから考える』(東浩紀・大山 顕 著、幻冬舎新書、2016)など多数あり。

●佐藤 大 (さとう・だい) 19歳の頃、放送構成・作詞の分野でキャリアをスタート。その後、ゲーム業界、音楽業界を経て、現在はアニメの脚本執筆を中心に、さまざまなメディアでの企画、脚本などを手がけている。2007年、『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』『サムライチャンプルー』『交響詩篇2021』『ぼくらのよあけ』『ポケットモンスター』など多数あり。

●速水 健朗 (はやみず・けんろう) ライター・編集者。メディア史や都市、ショッピングモールのテーマでこれこれ執筆。物心ついて以降の人生で住んだことのある住宅は、団地(社宅タイプ)5年、一軒家8年、木造アパート4年、賃貸マンション8年、分譲マンション19年。最高階位は、10階(14階建てマンション)。主な著書、『東京の半世紀』(東京書籍)など。

●稲田 豊史 (いなだ・とし) 1974年生まれ。ライター、編集者。新卒でギャガ・コミュニケーションズ(現ギャガ)に入社。その後、キネマ旬報社でDVD業界誌の編集長、書籍編集者を勤めた後、独立。代表作に『カウボーイビバップ』『サイダーのように言葉が湧き上がる』『映画ドラえもん』など多数あり。

●山内 マリコ (やまうち・まりこ) 1980年生まれ。小説家。富山県のシヨンス(現ギャガ)に入社。その後、キネマ旬報社でDVD業界誌の編集長、書籍編集者を勤めた後、独立。代表作に『カウボーイビバップ』『サイダーのように言葉が湧き上がる』『映画ドラえもん』など多数あり。

●妹尾 朝子 (せお・あさこ) 二人組漫画家「うめ」の作画担当。2001年『ちゃぶ台返し』でデビュー。映画化された『あのこは貴族』。近刊『マリリン・トールド・ミー』。映画と小説に目覚め、大阪芸術大学映像学科に進学。2008年『女に於ける女のためのR-18文学賞』読者賞を受賞し2012年『こはは退屈な日』で第39回ちばてつや賞一般部門大賞を受賞。代表作は、『ステイプス』『ぼくらのよあけ』『ぼくらのよあけ』『ぼくらのよあけ』『ぼくらのよあけ』など。現在は、『日本の歴史』(原作：松永隆一)、青児ハックマンのタロシロたちは実は人狼だった、という大胆なIFをベースにした歴史改変SF『南緯六〇度線の約束』を小説館ピッコミにて連載中。

夫婦の愛の巣

量産住宅

ありふれた
生活

3.12 公開!

2025.3.12水—8.24日



会期中、トークイベントの開催を予定しています。詳細が決定次第、当館HP/SNSでご案内します。

*イベントや賞の発表等、内容が変更となる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

高島屋史料館
TOKYO